

第5章. アメリカにとってのアフガン・イラク戦争

アフガン・イラク侵攻が終わると、「大量破壊兵器」の問題が頻繁に取り沙汰されるようになった。ブッシュ政権は大量破壊兵器の存在を攻撃理由にしたが、本当にあると信じていたのか、それともただの口実だったのか。ブッシュ政権の大量破壊兵器に関する事前の調査はかなりずさんだった感じはするし、どこまで本気で調べようとしたのかも判然としない。ニューヨーク・タイムズなどのメディアは攻撃を始める前に、本当に大量破壊兵器はあるのか、と強い疑問を投げかけていたのは事実だ。しかし、当時の米国民一般の受け止め方は「これだけひどいことをアメリカにしたツケは払ってもらう」という素朴な感情が多かったと思う。アメリカの国土が外国から攻撃されたのは歴史上3回ある。最初は1812年6月に勃発した米英戦争、次に1941年12月8日の日本軍による真珠湾攻撃、そして2001年9月の同時多発テロである。アメリカは戦争好きの国と批判されることも多いが、20世紀に入ってからアメリカが関わった戦争を見ると、少なくともアメリカの国益を前面に掲げたものは少ない。自由主義を守るとか、国際秩序の維持のためといった建前を表面上の“看板”にしているケースが多い。ところが、アフガン・イラク戦争はアメリカ自身が始めた戦いである。いわば「アメリカの、アメリカによる、アメリカのための戦争」だった。

アメリカはアフガン・イラク戦争で多くの若い米兵の命と、すべてを合わせると200兆円から300兆円にも達すると推定される巨額の財政資金を使ったが、痛手はそれだけにとどまらない。アメリカが建国以来大事にしてきた重要な価値観を国内外でひどく傷つけることになった。イラク戦争では正式な宣戦布告をしないまま、サダム・フセインが潜んでいると思われる場所をバンカーバスターという地中深くまで潜って爆発する新型ミサイルを使った。そこにフセインはいなかったものの、「アメリカはそこまでやるのか」という衝撃が走った。2011年5月2日、特殊部隊をパキスタンに派遣してオサマ・ビン・ラディンを殺害。この極秘作戦は当時のオバマ大統領らがホワイトハウスで現場の中継を見ながら実行され、殺害後に大統領が記者会見をしてビン・ラディンの死を内外に公表した。ビン・ラディン以外にも女性を含めた複数の巻き添えの死者が出たと言われる。この極秘作戦についてはやむを得なかったとの見方が少なくないものの、「アメリカの、アメリカによる、アメリカのための戦争」は自国の大切な価値観を傷つけるアメリカらしくない戦い方だった、という批判もあった。